

旬遊

第十六集

令和五年三月

なまけ者の俳句

眞田 宗興

私に句集の「巻頭文を書け」と一月の句会で決まりました。私は昔から句遊会の会員です。しかしながら、句会に出たことは一、二回に過ぎなかったのです。最近では会社勤めがなくなり出るようになりましたが。かろうじて毎月投句はしているので、首が繋がっている状態です。

毎月の投句は、なまけてその場で作る場合と、電車に乗って感じたことや、散歩しながら感じたことなどを基に作る場合があります。毎月の投句、三句は間際になって、しかも、遅れることがあって、皆さんに迷惑をおかけしています。

句会では、私の句が選ばれないことも多いですが、それを苦にしていたら持ちません。

私に影響を与えた俳人は山頭火と一茶です。二人

ともその人生が必ずしも幸せだったわけではあり
ません。

山頭火の句は「うしろすがたのしぐれてゆくか」
とか「分け入っても分け入っても青い山」など、乞
食坊主となつて放浪する姿です。彼は、五・七・五
に囚われてはいません。ただし、短くて季語は意識
していませんが、なぜか、季節を感じさせます。

一茶は、身内との遺産争い、子供を無くす悲しみ
が溢れています。

一茶の句に、「われと来て遊べや親のない雀」とか、
「やせ蛙まけるな一茶これにあり」があります。か
れは、五・七・五や季語を守っています。ただ、そ
の俳句は、生活そのものを謳っています。

私は五・七・五も、季語も無くても良いから、三
十一文字程度の短く生活からにじみ出たような句が
好きです。

どうか皆さん、私のような怠け者でもよいのです。
どうか参加してみませんか。

目次

黙の人人	佐藤 政百	六
家族のことなど	眞田 宗興	八
静けき麗湖	森 邦彦	一〇
めぐりあい	中山 知祐	一二
平和	大仲 正敏	一四
夏料理	石原 克己	一六
秋夕焼け	安井 正浩	一八
熱帯夜	城戸崎雅崇	二〇
ぼんくら	川田 勝美	二二

作

品

黙の人人

佐藤政百

出初め式 渴水ダム湖 び割れて

深く深く 天地返しや土匂ふ

枝垂れ梅 重力風に逆らはず

細き目の雛に 涙猫逝きて

薺摘む 八十代の少女かな

飛花落花 黙の人人 流れゆく

梨花咲けば ルート16 棚曇り

たかなや 関東ローム 突き出る

ぼうたんや風無き朝崩れをり

その辺り何かさうな蛇苺

麦秋や一日過ぎたり老い一日

女消えたり打ち水の横丁

早稲の田を降水帯の襲ひくる

十六夜の奇岩の影や妙義嶺

球場の光の束に月の弓

山霧や磁針の赤が揺れ動く

防犯のパトの拍子木寒の月

忘却は生きる術かな古日記

家族のことなど

眞 田 宗 興

勉強嫌な孫の将来初日の出

形だけの監査抜けたしフキノトウ

菜の花や地藏の赤いよだれかけ

植木屋に蝸牛負けじと角を出し

赤き実は鳥来たらずに残りをり

夏の雨あの香港の涙かな

小兵なりされどきつと打つ夏の夜に

寺裏の丘に登れば広き夏

刑務所の別れ道より天の川

八ヶ岳このピアノノ曲秋暮色

人に会うのが嬉しき秋になりにけり

いのこずちつけて帰ったこともあり

石段の手すりに顔出す女郎花

女の子にも歩き抜かれけり秋の暮

ボケてると笑わば笑え秋は美し

寒風の中を出て行く妻は愛しけり

憂きことも又良し年の暮れの湯ぞ

寒風が駆け上がりくるたどん坂

静けき麗湖

森 邦彦

比良伊吹出初め放水虹かける

凍月を射貫くが如き八坂の塔

天神のお札を飾るしだれ梅

野の香り集めてうまし蓬餅

子等嬉々と釈迦の象引く花祭

下総の野を白ふして梨の花

雲浮ぶ水田に燕宙返り

暑気払い鯉の煮付けで精を付け

保津川に水しぶき上げ川開く

鮒寿司に話のはずむ北琵琶湖

長刀の稚児も乗り出す祇園会や

大輪のダリアの笑顔登校日

甚兵衛の渡しの辺り早稲の香や

役目終へなほ空蟬の爪立てる

煮ぼうとう血洗島の初時雨

廃鉦の足尾の館紅葉初む

兄分ける今川焼の餡覗く

知恩院の僧侶奮闘除夜の鐘

季語の説明句になりがちで面白みのない句ばかり
浮かぶ。季語を背景に工夫が必要。

めぐりあい

中山知祐

きらきらとつぶらな瞳お年玉

葉牡丹をのぞく幼子鼻赤き

柳絮舞ふ池のみぎはの地蔵様

杜若児童写生の一时间

梅雨空やのつそりと猫庭よぎる

たそがれに遠ざかる人合飲の花

長き旅この蹲も通過点

校庭の真赤なダリア始業ベル

有難き施餓鬼の読経馬の耳

かまきりのぎよろ目ゆがめり三次元

柘榴採り飛行機雲の白き線

弓張月見上げて夜食メロンパン

咲きほこるつりふね草や誰を待つ

十六夜や手紙一通したためり

山霧や谷間に長き寺の鐘

夜行バス秋思も乗せて故郷へ

ただいまと父と一緒に今川焼

除夜の鐘ブラックホールをひとゆすり

平 和

大 仲 正 敏

年毎に宛先も減る賀状書く

初釜や松風を聴く四畳半

誘い合うラジオ体操春隣

雪催なじみの店の地酒かな

蛤のすまし汁にて箸をおき

雛飾る母が選んで祖母が買ひ

待ちかねた鍬の手ごたえ春の土

早春の接種日を待つ散歩かな

鯛焼きを懐に入れ待ち合わせ

金閣寺風情も変わる雨水かな

百花園スカイツリーにしだれ梅

森の朝子らの歓声甲虫

紅花や歴史を語る美術館

霧積の水車の宿の秋思かな

秋の雨戦火の中の家直し

雲取や山霧の人今いずこ

外国の人手戻らぬ豊の秋

にわか雨通り過ぎたる虫時雨

日常の中に、世界の大きな変化が繰りこまれました。コロナと戦火が一日も早く収束してほしいと願っています。

夏 料 理

石 原 克 己

釣り糸の垂れる池面に舞ふ柳絮

藁屋根の傷むがままに薺花

しぶき飛び光まぶしき春の磯

花まつり黄色い声の山の寺

藤棚の池面に映る影やはら

一本の黒き農道麦の秋

沢瀉の花の白さや朝の尾瀬

朝堀りの筍白き朝の膳

百名山花の群落夏来る

アマビエを描きて手酌の暑気払ひ

梢よりしづく静かに木曾の梅雨

夏暖簾くぐる舞妓の花街かな

浜木綿の花に静かな波の音

せせらぎの音心地よく夏料理

水桶に冷やしラムネの鬼子母神

山小屋の庇に架かる天の川

湯気立ちてほのかに甘き栗の飯

山の端に弓張月の琥珀色

秋夕焼け

安井正浩

急かされて躓く段差寒の入り

初晴れや出港の銅鑼低く低く

海風が通り過ぎゆく山椿

人知れず地蔵を飾るげんげの輪

梅咲くや紅白枝を差し交わし

ひこばえや災禍の跡の倒木に

凜と背を伸ばし五月の風を受く

筍の皮と格闘剥けば山

蛇苺鉄路の脇は安住地

合歓咲いて思案の末の墓じまい

空蟬に魂のまだ残りしか

電柱に標す海拔ダリア咲く

千枚田田ごとに早稲の色深む

椋鳥の旋回止みて街暮れる

秋夕焼だあれもない遊園地

転居決めそして始まる秋思かな

この先は地図に無き道山の霧

後から呼ばれしように木の実落つ

熱帯夜

城戸崎 雅崇

送迎のバス待つ母子朝桜

中庭のワイングラスに落花かな

本郷の坂に美彌子の合歓の花

桜芯降るものごとはかどらず

大輪のダリアの紅の重さかな

打水に染抜き文字の暖簾揺れ

パソコンの画面に乾杯暑気払ひ

筍を剥く一瞬のパンダかな

夏布団からだの上に落ちつかず

梅雨曇り口に入れたる薄荷飴

熱帯夜男もすなる長電話

打楽器の響き日比谷に夏きたる

古書店のあるじ何読む秋の昼

銀漢や海に開けし露天風呂

森抜ける風やはらかに芒揺れ

流れゆく先への思ひ施餓鬼船

裸木となりてなるほどさるすべり

探梅となりぬ目黒の寺めぐり

「句遊会」に入会し俳句をはじめて一二年目の二〇
二二年は「氷室同人」（尾池和夫先生）「俳人協会会
員」「香雨同人」（片山由美子先生）にしていただいた
節目の年になりました。

ぼんくら

川田勝美

黒土に新芽の見ゆる雨水かな

訪へば小田原城に花の雨

神田川柳絮は薄く映りたる

残り香と共に食する草餅や

笑み交し柏餅食む小田原城

おもだかと岸辺の小魚戯れる

可愛くもその名に怖じる蛇莓

軒下に燕帰りてほと息す

夕涼み縁台将棋待ったなし

生かされしわが身と比べ空蟬は

街路樹に寄り添って咲くケシの花

森の道梢揚げば初紅葉

足もとでいちちょうの枯葉ダンシング

おでん鍋コロナの愚痴を放り込み

寒牡丹小さきながら凜と咲く

義士会とベーターベンで暦果つ

古日記昔のことを懐かしむ

くる年も息災祈る除夜の鐘

あ と が き

「句遊」第十六集をお届けします。

第十五集以降、令和三年、四年の句遊会の活動状況は次のとおりです。

月例会会・令和三年十二回、令和四年十二回、
計二十四回。

(このうち、十三回は、新型コロナウイルス対応のため、通信句会で実施)

吟行・・・令和四年十月 国立科学博物館
・付属自然教育園

写友会、画友会との合同展

第三十五回合同展 令和四年 一月

第三十六回合同展 令和四年 七月

これらの活動等で生まれた作品の中から自選十八句、九名の出品です。(なお作品中の新旧力ナ遣いは、一句の中で混在しなければよしとしております)

「ねんりんピック神奈川2022」の俳句交流大会に句遊会としてはじめて参加し、会員の城戸崎雅崇氏が入選しました。

令和五年三月

編集委員

森 邦彦

佐藤 政夫

石原 克己

中山 祐伸

安井 正浩(記)

一般社団法人
監査懇話会
句遊会
(代表 森 邦彦)